

夏目漱石

手紙



手

紙

一

モーパサンの書いた「二十五日間」と題する小品には、
 ある温泉場の宿屋へ落ち付いて、着物や白襯衣しやつを衣裳棚いしやうだな
 へしまおうとするときに、その抽出ひきだしを開けて見たら、中
 から巻いた紙が出たので、何気なく引き延ばして読むと、
 「私メヴァンサンジュールの二十五日」という標題が眼に触れたという冒頭が
 置いてあって、その次にこの無名氏の所謂いわゆる二十五日間が

一字も変えぬ元の姿で転載された体になっている。

プレヴオーの「不在」と云う端物の書出には、はもの かきだし 巴里の

ある雑誌に寄稿の安受合をしたため、ドイツ 独逸のさる避暑地へ下りて、そこ 其処の宿屋の机か何かの上で、しきりに構想に悩みながら、何か種はないかという風に、机の抽出を一々開けて見ると、最終の底から思いがけなく手紙が出て来たとあって、これにもその手紙がそっくりそのまま出してある。

二つとも能く似た趣向なので、あるい 或は新しい方が古い人の遣った迹を踏襲したのではなからうかという疑いさ

え挟さしはさめる位だが、それは自分にはどうでも宜よろしい。ただ自分もつい近頃、これと同様の経験をした事がある。その所為せいか今までは成程小説家だけあって旨うまく拵こしらえるなどばかり感心していたのが、それ以後實際世の中には随分似た事が沢山あるものだという気になって、寧ろ偶然の重複に咏嘆えいたんする様な心持が幾分があるので、つい二人の作をここに並べて挙げたくなつたのである。

尤もつともモーパサンののは標題の示す如く、逗留とうりゆう二十五日間の印象記と云う種類に属すべきもので、プレヴォーのは滞在中の女客に宛てた艶なまめかしい男の文だから、双方

とも無名氏の文字もんじそれ自身が興味の眼目である。自分の経験もやはり不ふ凶とした場所で意外な手紙の発見をしたと云う事にはなるが、それが導火線になつて、思いがけなく或實際上の効果を収め得たのであるから、手紙その物にはそれ程興味が無い。少くとも、小説的な情調の下もとに、それを読み得なかつた自分にはそういう興味はなかつた。其そこ処こが前に挙げた仏蘭西フランスの二作家と違ふ所で、其処が又彼等よりも散文的な自分をして、彼等の例にならつて、その手紙をこの話の中心として、一字残らず写さしめなかつた原因になる。

手紙は疑いもなく宿屋で発見されたのである。場所も場合も殆んど仏蘭西の作家の筆にした所と殆んど変りはない。けれどもどうしてとかどんな手紙をと云う問に答えるためには、それを発見した当時から約一週間程前に^{さかの}溯^{いよいよ}ぼって説明する必要がある。

愈^{いよいよ} K市へ立つという前の晩に成^{なっ}て、妻^{さい}が丁度好^{ついで}い序だから、帰りに重吉さんの所へ寄^いって入^いらっしゃい、そうして重吉さんに会^いって、あの事をもつと判^は然^っ極^きめて入^いらっしゃい。何^ただか紙^こ鳶^こが木の枝へ引懸^いつていながら、途中で揚^いが^けつ^てる様な気がして不可^いま^けせんからと云つ

た。重吉の事は自分も同感であつた。それにしても妻によくこんな気の利いた言葉が使えらると思つて、御前誰かに教わつたのかいと、何も答えない先に、まず冗談半分の疑いを仄めかして見た。すると妻は存外真面目切つた顔付で、何をですと問い返した。開き直つたという程でもないが、此方の意味が通じなかつた事だけは慥な様に見えたから、自分は紙鳶の話はそれぎりにして、直接重吉の事を談合した。

重吉といふのは自分の身内とも厄介者とも片の付かない一種の青年であつた。一時は自分の家に寐起をしてま

で学校へ通った位関係は深いのであるが、大学へ這入はいつて以来下宿をしたぎり、四年の課程を終るまで、とうとう家へは帰らなかつた。尤もつとも別に疎遠になつたと云う訳ではない、日曜や土曜もしくは平日でさえ氣に向いた時は遣やつて来て長く遊んで行つた。元來が鷹揚おうような性質たちで、素直に男らしく打ち寛くわろいでいる様に見えるのが、持つて生れたこの人の得であつた。それで自分も妻も甚だ重吉を好いていた。重吉の方でも自分等を叔父さん叔母さんと呼んでいた。

二

重吉は学校を出たばかりである。そうして出るや否や
すぐ田舎へ行ってしまった。何故なぜそんな所へ行くのかと
聞いたら別に大した意味もないが、唯口を頼んで置いた
先輩が、行ったらどうだと勧めるからその氣になつたの
だと答えた。それにしてもHはあんまりじゃないか、せ
めて大阪とか名古屋とかなら地方でも仕方がないけれど
もと、自分は当人が既に極めたというにも拘かからず一応

彼のH行に反対してみた。その時重吉はただにやにや笑っていた。そうして今急にあすこに欠員が出来て困てると云うから、当分の約束で行のゆくです、直じき又帰って来ますと、あたかも未来が自分の勝手になる様な物の云い方をした。自分はその場で重吉の「又帰って来ます」を「帰って来る積つもりです」に訂正して遣りたかつたけれどもそう思い込んでいるものの心を、無益にざわ付かせる必要もないからそれはそれなりにして置いて、じやあの事はどうする積だと尋ねた。「あの事」は今までの行き掛り上、重吉の立つ前に是非とも聞いて置かなければならない問

題だったからである。すると重吉は別に気に掛^{かけ}る様子もなく、万事貴方に御任せするから宜^{よろ}しく願いますと云つたなり、平気でいた。刺激に対して急劇な反応を示さないのはこの男の天分であるが、それにしても彼の年齢と、この問題の性質から一般的に見た所で、重吉の態度はあまり冷静過ぎて、定量未満の興味しか有^もち得ないという風に思われた。自分は少し不審を抱いた。

元来自分と妻^{さい}と重吉の間にただ「あの事」として一種の符牒^{ふちよう}の様^{よう}に通用しているのは、実を云うと、彼の縁談に関する件であった。卒業の少し前から話が続いている

ので、自分達だけには単なる「あの事」で一切の経過が明かに頭に浮む所せい為いか、別段改まって相手の名前などは口へ出さないで済ます事が多かったのである。

女は妻さいの遠縁に当るものの次女であった。その関係で時々自分の家に入出入る所から自然重吉とも知合になつて、会えば互に挨拶する位の交際が成立した。けれども二人の関係はそれ以上に接近する機会も企てもなく、殆ど同じ距離で進行するのみに見えた。そうして二人共それ以上に何物をも求むる気色けしきがなかった。要するに二人の間は、年長者の監督もとの下に立つある少女と、まだ修業

中の身分を自覚するある青年とが一種の社会的な事情から、互と顔を見合せて、礼義にもと戻らないだけの応対をするに過ぎなかった。

だから自分は驚いたのである。重吉が昂あがらずせま逼らず、常と少しも違わない平面な調子で、あの人を妻に貰いたい、話てくれませんかと云った時には、君本当かと実際に聞き返した位であつた。自分はすぐ重吉の挙止動作が不
断に大抵は真面目である如く、この問題に対してもまた真面目であるのを発見した。そうして過渡期の日本の社会道徳に背そむいて、利の歩ほを相互に進める事なしに、意志

の重みを初から監督者たる父母に寄せ掛けた彼の行い振りを快よく感じた。其処で彼の依頼を引き受けた。

早速妻を遣つて先方へ話をさせてみると、妻は女の母の挨拶だといつて、妙な返事を齎もたらした。金はなくつても構わないから道楽をしない保証の付いた人でなければ遣らないと云うのである。そうして何故なぜそんな注文を出すかの、理由いわれが説明としてその返事に伴っていた。

女には一人の姉があつて、その姉は二三年前既にある資産家の所へ嫁に行つた。今でも行つている。世間並の夫婦として別に他の注意を惹ひく程の波瀾はらんもなく、まず平

穩に納まっっているから、人目にはそれで差支ない様に見えるけれども、姉娘の父母はこの二三年の間に、苦々しい思いを断えず陰で舐めさせられたのである。その凡ては娘の片付いた先の夫の不身持から起ったのだと云えばそれまでであるが、父母だって、娘の亭主を、業務上必要の交際から追い出してまで、娘の権利と幸福を庇護しようとして試みる程捌けない人達ではなかった。

三

実を云うと、父母は始めからそれを承知の上で娘を嫁にやったのである。それのみか、腕利うでききの腕を最も敏活に働かすという意味に解釈した酒と女は、仕事の上に欠くべからざる交際社会の必要条件とまで認めていた。それなのに彼等はやがて眉を顰ひそめなければならなくなってきた。かねて丈夫であった娘の健康が、嫁に入いって暫しばしばくすると、眼に付くように衰え出したときに、彼等はもう

相応に胸を傷めた。娘に会うたびに母親は何処か悪くはないかと聞いた。娘はただ微笑して、別段何ともないとはばかり答えていた。けれどもその血色は次第に蒼くなるだけであつた。そうして仕舞にはとうとう病氣だと云う事が分つた。しかもその病氣があまり質の好いものでないといふ事が分つた。猶よく探究すると、公けに云い難い夫の疾が何時の間にか妻に感染したのだと云う事まで分つた。父母の懸念が道德上の着色を帯びて、好悪の意味で、娘の夫に反射する様になつたのはこの時からである。彼等は氣の毒な長女を見るにつけて、これから嫁

に遣る次女の夫として、姉のそれと同型の道楽ものを想像するに堪えなくなつた。それで金はなくても構わないから、どうしても道楽をしない保険付の堅い人に貰つてもらおうと、夫婦の間に相談が纏まとまつたのである。

自分の妻さいは先方から聞いて来た通りをこう云う風に詳しく繰返して自分に話した後のち、重吉さんなら間違いはなからうと思うんですが、どうでしょうと云つた。自分は只そうさと答えたまま、畳の上を見詰めていた。すると妻は稍やや疑ぐつたような調子で、重吉さんでも道楽をするんでしようかと聞いた。

「まあ大丈夫だろうよ」

「まあじや困るわ。本当に大丈夫でなくつちや。だつてもしか、嘘でも吐いたら、私濟まないんですもの。私ばかりじゃない、貴方だつて責任が御有りじやありませんか」

こう云われてみると成程先方へ好加減な返事をするのも如何いかなものである。と云つて、あの重吉が遊ぶとは、どうしても考えられない。無論彼の容子には爺じ々汚むいとむか無骨ぶこつ過つぎるとか、凡すべて粹いきの裏へ廻るものは一つもなかつた。けれども全面が平たく尋常に出来上つている所せ為い

か、何処と指して、此処が道楽臭いという点もまたまるで見当らなかつた。自分は妻と色々話した末、こう云つた。

「まあ大抵宜かろうじやないか。道楽の方は受け合いますと云つといでよ」

「道楽の方って——。為しない方をでしよう」

「当り前さ。為する方を受け合っちゃ大變だ」

妻は又先方へ行つて、決して道楽をする様な男じや御座いませんと受合つた。話はそれから発展し始たのである。重吉が地方へ行くと云い出した時には、それがずつ

と進行して、もう十の九までは纏まっていた。自分は重吉のHへ立つ前に、わざわざ先方へ出掛けて行って、父母の同意を求めた上で重吉を立たせた。

重吉とお静さんとの関係は其処まで行って、ぴたりと停こんにちったなり今日に至ってまだ動かもつとずにいる。尤も自分はその程気にも掛からない、今に何方どっちからか動き出すだろう、万事はその時の事と覚悟を極めていたが、妻は女だけに心配して、この間も長い手紙を重吉に遣って、一体あの事はどうなさる積つもりですかと尋ねたら、重吉は万事宜しく願いますと例の通りの返事を寄こした。その前

聞き合わせた時には、私はまだ道楽を始めませんから、大丈夫ですという端書が来た。妻はその端書を自分の所へ持って来て、重吉さんも随分呑気のんきね、まだ始めませんって、今に始められた日にや、大丈夫でも何でもないじやありませんか、冗談じゃあるまいし、と少し怒った様な語気を洩らした。自分にも重吉の用いたこのまだと云う字が如何いかにも可笑おかしく思われた。妻に、当人本気なのかなと云った位である。

妻が評した如く、こう云う風に、いつまでも、紙た鳶こが木の枝に引掛って中途から揚がっている様な状態ありさまで推し

て行かれては間へ這入った自分達の責任としても、仕舞には放って置かれなくなるのは明らかだから、今度の旅行を幸い、帰りにHへ寄って、所謂「あの事」をもっと判然はっきり片付けて来たなら好かろうと云う妻の意見に従う事に極めて家を出た。

四

汽車中では重吉の地方生活を色々に想像する暇もあつたが、目的地へ下りるや否や、すぐ当用の為ほんとうに忙殺いさいされ

て、「あの事」などは殆ど考えもしなかった。ようよう四五日掛って、一段落が付いた時、自分は又汽車に揺られながら、まだ見ないHの町や、その町の中にある重吉の下宿している旅館などを、頭の奥に漂よう画えの様ように眺めた。固もとより物もの数かず寄よのさせる業わざだから、煙草けむりの煙けぶりに似て、取留る事の出来ないうちに、また煙草の煙けむりに似た淡い愉快があつた。とかくする内に汽車はとうとうHへ着いた。

自分はすぐ俵くるまを雇よつて、重吉のいる宿屋の玄関へ乗付けた。番頭に此処ここに佐野さのという人が下宿している筈だ

がと聞くと番頭は御辞儀を二つばかりして、佐野さんは先達せんだつてまで御出おいでになりましたが、ついこの間御引移りになりましたと云う。怪けしからん事だと思ひながらも、猶なお引越先の模様を尋ねてみると、到底自分などの行つて、一晩でも二晩でも厄介になれそうな所ではないらしい。一層いっそう此処へ泊る方が楽だろうと思つて、じゃ空あいた部屋へ案内してくれと云うと、番頭は又御辞儀を一つして、誠に御気の毒様で御座いますが、招魂祭でどの室へやも塞ふさがっておりますのでと叮嚀ていねいに断つた。自分は傘を突いたまま、しばらく玄関の前に立っていた。正式に云うと、あ

らかじめ重吉に通知をした上、猶H着の時間を電報で云
 って遣^{やる}べきであるが、なるべく御互の面倒を省いて簡略
 に事を済すのが当世だと思つて、わざと前触^{まえぶれ}なしに重吉
 を襲つたのであるが、愈^{いよいよ}来てみると、自分の遣口^{やりくち}はた
 だの不注意から、出る不都合な結果を、自分の上に投げ
 掛たと同じ事になつてしまった。

自分はHにどんな宿屋が何軒あるかまるで知らなかつ
 たが、この旅館がその内で一番善いのだと云う事だけは、
 かねて受取つた重吉の手紙によつて心得ていた。成程奥
 を覗^{のぞ}いてみると、廊下が折れ曲つたり、中庭の先に新し

い棟が見えたりして、さも広そうであつた。自分は番頭に何処か都合が出来るだろうと云つた。番頭は当惑した様な顔をして、暫く考えていたが、甚だ見苦しい所で、一夜泊の御客様には御氣の毒で御座いますが、佐野さんの入らした御座敷なら、どうか致しましょうと答えた。その口振から察すると、何でも余程汚ない所らしいので、又少し躊躇ちゆうちよし掛けたが、もとよりこの地へ来て体裁を顧みる必要もない身だから、一晩や二晩はどんな室へやで明かしたつて構わないと云う氣になつて、この間まで重吉のいたと云うその部屋へ案内して貰つた。

室^{へや}は第一の廊下を右へ折れて、其^{そこ}処の縁側から庭下駄
 を穿^{ふたあし}いて、二足三足三和土^{たたき}の上を渡らなければ這入れな
 い代りに何処とも続ていない所が、まるで一軒立の観を
 与えた。天井の低いのが、柱の細いのが、さも茶がかつた
 空気を作ると共に、如何^{いか}にも湿^{しめつ}っぽい陰気な感じがした。
 そうして畳と云わず襖^{ふすま}と云わず甚しく古びていた。向^{むこう}
 の藤棚の陰に見える少し出張った新築の中二階などと較
 べると、まるで比較にならない程趣が違っていた。
 「こんな所に這入っていたのか」と思いながら、自分は
 茶を呑んで暫く座敷を見廻^{すずり}していたが、やがて硯^{すずり}を借

りて、重吉の所へやる手紙を書いた。ただ簡単にK市へ用があつて来た序ついでに此処へ寄つたから、すぐ来いというだけに留めたとど。それから湯に入つて出ると、もう食事の時間になつた。自分はなるべく重吉と一所に晩飯を食おうと思つて、煙草を何本も吹かしながら、彼の来るのを心待ちに待っているうちに、向うの中二階に電気燈が点いて、賑やかな人声が聞え出した。自分はとうとう待ち切れず一人膳に向つた。給仕に出た女が、招魂祭で何処の宿屋でも込み合つているとか、町では色々の催しがあるとか、佐野さんも今晚はきつと何処かへ御呼ばれな

すったんでしようとか云うのを聞きながら、麦酒ビールを一杯呑んだ。下女は重吉の事を大人おとなしい好い方だと云った。女に惚れられるかいと聞いたら、えへへと笑っていた。道楽をするだろうと聞いたら、下を向いて小さな声をしていいえと答えた。

五

食事が済んで下女が膳を下げたのは、もう九時近くであつた。それでも重吉はまだ顔を見せなかつた。自分は

ひとりで縁鼻へ座蒲団を運んで、手摺てすりに靠もたれながら向座敷の明るい電気燈や派出な笑い声を湿っぽい空気の中から遠く窺うかがってつまらない心持をつまらないなりに引摺ひきずる様な態度で、煙草ばかり吹かしていた。そこへ先刻さつきの下女が襖ふすまを開けて、漸やっと入らっしやいましたと案内をした。その後あとから重吉が赤い顔をして入って来た。自分は重吉の赤い顔をこの時始めて見た。けれども席あげさげに着いて挨拶をする彼の様子と云い、言葉数と云い、抑揚あげさげの調子と云い、凡てが平生の重吉そのままであつた。自分は彼の言語動作のいずれの点にも、酒氣に駆られて動くの

だと評して然るしかべき際立った何物をも認めなかつたので、異常な彼の顔色に就いては、別に云う所もなく済ました。しばらく少時して彼は茶器を代えに来た下女の名を呼んで、コップ洋盃に水を一杯くれと頼んだ。そうして自分の方を見ながら、どうも咽喉のどが渴いてと間接な弁解をした。

「大分飲んだんだね」

「ええ御祭りで、少し飲まされました」

赤い顔の事は簡単にこれで済んでしまった。それから何処をどう話を通ったか覚えていないが、三十分ばかり経つうちに、自分も重吉も何時の間にか、いわゆる所謂「あの事」

の圏内で受け答えをする様になった。

「一体どうする気なんだい」

「どうする気だつて、——無論貫いたいんですがね」

「真劔の所を白状しなくつちや不可いないよ。好加減な事を云つて引張る位なら、一層いっそきっぱり今のうちに断る方が得策だから」

「今更断るなんて、僕は御免だなあ。實際叔父さん、僕はあの人が好きなんだから」

重吉の様子に何処と云つて嘘らしい所は見えなかつた。

「じゃ、もっと早くどしどし片付けるが好いじゃないか、何時まで立っても愚図々々で、傍はたから見ると、如何いかにも煮え切らないよ」

重吉は小さな声でそうかなと云って、しばらく休んでいたが、やがて元の調子に戻って、こう聞いた。

「だって貰ってこんな田舎へ連れてくるんですか」

自分は田舎でも何でも構わない筈だと答えた。重吉は先方がそれを承知なのかと聞き返した。自分はその時一寸困った。実はそんな細かな事まで先方の意見を確めた上で、談判に來た訳ではなかったのだからである。けれ

ども行き掛り上已^{やむ}を得ないので、

「そう話したら、承知するだろうじやないか」と勢いよく云つて退^のけた。

すると、重吉は問題の方向を変えて、目下の経済事情が、到底暖かい家庭を物質的に形づくる程の余裕を有^もつていないから、しばらくの間独りで辛抱する積^{つもり}でいたのだという弁解をした上、最初の約束によれば此年^{ことし}の暮には月給が上がって東京へ帰れる筈だから、その時は先さえ承知なら、どんな小さな家でも構えて、お静さんを迎える考えだと話した。もし事が約束通りに運ばない為、

月給も上らず、東京へも帰れなかつたあかつき 暁には、その時こそ、先方さえ異存がなければ、自分の云った様にする気だから、何分宜しく頼むという事も付け加えた。自分は一応尤もだと思った。

「そう御前の腹が極まつてるなら、それでいい。叔母さんも安心するだろう。御静さんの方へも、よくそう話して置こう」

「ええどうぞ——。然し僕の腹は大抵貴方がたには分つてる筈ですがねえ」

「そんなら、あんな返事を寄こさないが好いよ。ただ宜

しく願いますだけじゃ何だか一向分らないじゃないか。そうして、あの端書は何だい。私はまだ道楽を始めませんから、大丈夫ですって。本気だか冗談だかまるで見当が付かない」

「どうも済みません。——然し全く本気なんです」と云いながら、重吉は苦笑して頭を搔いた。

「あの事」はそれで切り上げて、あとは纏まらない四方よも山やまの話に夜を更かした。折角だから二三日逗留して緩ゆっくりして入らっしやいと勧めてくれるのを断って、やはり翌日あくるひ立つ事にしたので、重吉はそんなら御疲れでしょう、

早く御休みなさいと挨拶して帰って行つた。

六

翌^{あくるあさ}朝顔を洗つて室へ帰ると、棚の上の鏡台が麗々と障子の前に据え直してある。自分は何気なくその前に坐ると共に鏡の下の櫛^{くし}を取り上げた。そうしてその櫛を拭く積^{つもり}か何かで、鏡台の抽出^{ひきだし}を力任せに開けてみた。すると浅い桐^{きり}の底に、奥の方で、何か引掛^てる様な手応^{たえ}がしたのが、忽^{たちま}ち軽くなつて、するすると、抜けて来た途

端に、捲き納めて振れたような手紙の端が筋違すじかいに見えた。自分は引手繰ひったくるようにその手紙を取って、直五六寸破いて櫛しらかみを拭こうとして見ると、細かい女の字で白紙の闇くらみを辿たどると云ったように、細長くひよろひよろと何か書いてあるのに気が付いた。自分は一寸ちよつと一二行読んでみる気になつた。然しこのひよろひよろした文字が言文一致で綴つづられているのを発見した時、自分の好奇心は最初の二行では満足する事が出来なくなつた。自分は知らず知らず、先に裂さき破つた五六寸を一息に読み尽した。そうして裂き残しの分へまでもどんどん進んで行つた。こう進

んで行くうちにも、自分は絶えず微笑を禁じ得なかつた。実をいうと手紙はある女から男に宛た艶書えんしょなのである。

艶書だけに一方から云うと甚だ陳腐には相違ないが、それが又形式の極きまらない言文一致で勝手に書き流してあるので、随分奇抜だと思ふ文句がひよいひよいと出て来た。ことに字違いや仮名違が眼に付いた。それから感情の現わし方が如何にも露骨でありながら一種の型に入っているという意味で誠が却かえつて出ていない様にも見えた。最も恐るべく下手な恋の都々どどいっ一なども遠慮なく引用してあつた。凡てを綜合して、書き手の黒人くろろうとである事が、誰

の眼にも何より先にまず映る手紙であつた。どうせ無関係な第三者が他のひと艶書のぬす偷み読をするときに滑稽の興味が加わらない筈はない訳であるが、書き手が節操上の徳義をふたん負担しないで済む黒人の様な場合には、この興味が他のげんしゆく厳肅な社会的觀念に妨げられるおそれ虞がないだけに、読み手は甚だ気楽なものである。

そう云う訳で、自分は多大の興味を以てこの長い手紙をくすくす笑いながら読んだ。そうして読みながら、こんな女から思われている色男は、一体何者だろうかとの好奇心を、最後の一行が尽きて、名宛の名が自分の眼

の前に現れるまで引摺って行つた。ところがこの好奇心が遺憾なく満足されべき画竜点晴がりゆうてんせいの名前まで愈いよいよ読み進ほんぜんんだ時、自分は突然驚いた。名宛には重吉の姓と名が判然書いてあつた。

自分は少しの間ぼんやり庭の方を見ていた。それから手に持った手紙をさらさらと巻いて浴衣の懐へ入れた。そうして鏡の前で髪を分けた。時計を見ると、まだ七時である。然し自分は十時何分かの汽車で立つ筈になつていた。手を敲たたいて下女を呼んで、すぐ重吉を車で迎えに遣るように命じた。その間に飯を食う事にした。

何だか可笑しいという気分も幾分か混っていた。けれども惣体そうたいに「あの野郎」という心持の方が勝っていた。そのあの野郎として重吉を眺めると、宿を易かえて何時までも知らせなかったり、散々人を待たせて、気の毒そうな顔もしなかったり、漸やっと這入って来たかと思うと、一面アルコールに彩どられていたり、凡て不都合だらけである。が、平生どの角度に見ても尋常一式なあの男が、何時の間に女から手紙などを貰って済まし返っているのだらうと考えると、当り前過ぎる不断の重吉と、色男として別に通用する特製の重吉との矛盾が頗すこぶる滑稽に見

えた。従つて自分は何方どっちの感^じで重吉に対して好いか分
らなかつた。けれども何方かに極きめて、これを根本調と
して会見しなければならぬと云う事に気が付いた。自
分は食後の茶を飲んで楊枝を使いながら、此処へ重吉が
来たらどう取扱つたものだろうと考えた。

七

其処へ宿から迎えに遣つた車に乗つて、彼はすぐ馳かけ
付けて来た。彼に対する態度をまだ能く定めていない自

分には、彼の来かたが寧ろ早過ぎる位、現れようが今度は迅速であつた。彼は簡単に、早いじゃありませんか、今朝起きたら直上る積でいた所を御迎えで——と云つたまま、其処へ坐つて、自分の顔を正視した。この時傍はたから二人の様子を虚心に観察したら、重吉の方が自分より遥はるかに無邪気に見えたに違ない。自分は黙つていた。彼は白足袋に角帯で単衣ひとえの下から鼠色の羽二重を掛けた襦袢じゆばんの襟えりを出していた。

「今日は大分洒落しやれてるじゃないか」

「昨夕ゆうべもこの服装なりですよ。夜だから分らなかつたんでし

よう」

自分は又黙った。それから又こんな会話を二三度取り換わしたが、何時でもその間に妙な穴が出来た。自分はこの穴を故意に拵こしらえている様な感じがした。けれども重吉にはそんな蟠わだかまりがないから、いくら口数を減らしてもその態度が自おのずから天然てんねんであつた。仕舞に自分は真面目になつて、こう云つた。

「実は昨夕もあんなに話した、あの事だがね。どうだ、一層の事きつぱり断つてしまつちや」

重吉はちよつと腑に落ちないという顔付をしたが、そ

れでも何時もの様なおっとりした調子で、何故なぜですかと聞き返した。

「何故って、君の様な道楽ものは向の夫になる資格がないからさ」

今度は重吉が黙った。自分は重ねて云った。

「己おれはちゃんと知ってるよ。お前の遊ぶ事は天下に隠れもない事実だ」

こう云った自分は、急に自分の言葉が可笑しくなった。けれども重吉が苦笑いさえせず控えていてくれたので、此方も真面目に進行する事が出来た。

「元来男らしくないぜ。人を胡麻化^{ごまか}して自分の得ばかり考えるなんて。まるで詐欺だ」

「だって叔父さん、僕は病気なんかには、まだ罹^{かか}りやしませんよ」と重吉が割り込む様に弁解したので、自分は又可笑しくなった。

「そんな事が他^{ひと}に分るもんか」

「いえ、全くです」

「とにかく遊ぶのが既に条件違反だ。御前はとても御静さんを貰う訳に行かないよ」

「困るなあ」

重吉は本当に困った様な顔をして、色々泣き付いた。

自分は頑として破談を主張したが、最後に、それならば、彼が女を迎えるまでの間、謹慎と後悔を表する証拠として、月々俸給のうちから十円ずつ自分の手本へ送って、それを結婚費用の一端とするなら、この事件は内済にして勘弁してやろうと云い出した。重吉は十円を五円に負まてくれと云ったが、自分は聞き入れないで、とうとう此方こっちの云い条じょう通り十円ずつ送らせる事に取り極めた。

間もなく時間が来たので、自分は早速起って着物を着換くえた。そうして俵くろまを命じて停車場ステーションへ急がした。重吉は

無論付いて来た。けれども鞆^{かばん}膝掛^{ひざかけ}その他一切の手荷物
は既に宿屋の番頭が始末をして、ちやんと列車内に運び
込んであったので、彼はただ手持無沙汰にプラットフォ
ームの上に立っていた。自分は窓から首を出して、重吉
の羽二重の襟^{えり}と角帯と白足袋を、得意気に眺めていた。
愈^{いよいよ}発車の時刻になって、車の輪が廻り始めたと思ふ際
どい瞬間をわざと見計って、自分は隠袋^{かくし}の中から今朝読
んだ手紙を出して、おい御土産を遣ろうと云いながら、
出来るだけ長く手を重吉の方に伸した。重吉がそれを受
取る時分には、汽車がもう動き出していた。自分はそれ

ぎり首を列車内に引込めたまま、ステーション停車場を外れるまで決してプラットホームを見返らなかつた。

宅うちへ帰つても、手紙の事は妻さいには話さなかつた。旅行後一カ月目に重吉から十円届いた時、妻はでも感心ねと云つた。二カ月目に十円届た時には、全く感心だわと云つた。三カ月目には七円しか来なかつた。すると妻は重吉さんも苦しいんでしようと云つた。自分から見ると、重吉の御静さんに対する敬意は、この過去三カ月間おいに於て、既に三円がた欠乏していると云わなければならぬ。将来の敬意に至つては無論疑問である。

日本文学電子図書館

文鳥・夢十夜

著 者：夏目漱石

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館